

冬季海難に備え、巡視船おくしりが救難訓練
～訓練想定：主機関故障・漂流船をえい航、火災船に対する放水消火～

令和2年（2020年）秋、巡視船おくしり（PM39、総トン数335トン、長さ56メートル）が函館港外において救難訓練を行いました。

訓練は、巡視船にとって優先度の高い、（訓練1）漂流船のえい航、（訓練2）火災船に対する放水消火の2つです。それぞれ

（訓練1）「函館山南西約5海里（約9km）の海域を航行中、船の主機関が故障し、漂流状態になり、乗組員による復旧を試みるものの叶わず。118番通報により海上保安庁に対し救助を要請。漂流船は風潮流の影響により陸の方向へ流されている。通報を受け現場海域に駆けつけた巡視船は漂流船をロープでえい航。」

（訓練2）「同様の海域において、船内から出火、乗組員で消火活動を試みるも消火できず、乗組員は退船。通報を受け現場海域に駆けつけた巡視船は、放水により消火を試みる。」

という想定で行いました。

訓練1、2において現場に駆けつけ救助活動を行うのは巡視船おくしり、訓練1、2の機関故障・漂流船、火災船役はいずれも巡視艇ゆきぐも（PC117、総トン数100トン、長さ32メートル）です。訓練当日の天候は晴れ、現場海域は潮の流れも速く、最大毎秒14mの西寄りの風が吹くなかでの訓練となりました。

海難現場海域に向かう巡視船おくしり



【訓練 1 : えい航訓練】



救助船である巡視船おくしり後部甲板に漂流船をえい航するための
直径45mmのえい航索200mをスネークダウンと呼ばれる方法で整理



漂流中の漂流船付近の潮流や風向を勘案し、救助船は漂流船にアプローチ
救助船から近距離もやい銃を発射、えい航索に繋がる先導索を要救助船に送る
(その後の作業)

- ・ もやい銃により届けられた先導索を漂流船側で引き、えい航索を手繰り寄せる
- ・ えい航索を漂流船側で固定した後、救助船側からゆっくりとえい航索を繰り出す
- ・ 漂流船側でえい航索が確実に固定されたことを確認し、ゆっくりとえい航を開始



救助船側から漂流船を見る



漂流船側から救助船を見る



【訓練 2 : 放水消火訓練】



現場到着後は火災船に風上方向からアプローチ



自船の放水能力を見極めながら消火開始



火災船（想定）に対し、徐々に接近



今回、訓練はこれから冬場を迎えるにあたりあらためて行ったものであり、函館海上保安部では冬季に発生する海難に備えてまいります。